
クラブマン

tre

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クラブマン

【Nコード】
N2895H

【作者名】
tree

【あらすじ】
恋愛、友情、単車。それぞれが突き動かす純粋な高校生達の心群。

第1話：回想1（前書き）

単車ありきのストーリーなので、作中に書かれている車種名（第1話中の「CB400Four」や「GB250クラブマン」等）をコピー&ペーストして検索してみてください。こんな単車なんだ、とわかっていただけるだけでよりいっそう話もわかっていただけるかと思います。お手数ですが、是非よろしく願います。

それと、登場人物達が話す方言ですが、私自身、三重弁であり標準語はいまいち……。ということでも三重弁でしか表現できず、わかりにくい部分があるかもしれません。申し訳ございません。

最後に、基本的にこの話は主人公の一人称であります。他の登場人物の心の動きは、皆様の捕らえ方しだいです。

長々と失礼しました。

第1話：回想1

周りの連中は大学だの専門学校だの、進路の話に夢中だ。

その会話はイヤでも耳に入ってくる。

正直、耳障りな連中だ。

一人が少しの不安を膨張させて大げさに相談する。

それに対して周りは、心配しているポーズだけとっている。

本気で他人の心配ができるヤツはそうはいない。

オレもどうでもいいヤツにはそんな態度をとる。

話だけ合わせておけば、波風が立つこともない。

オレは進路に悩んでいるワケじゃない。

そんな連中のやり取りが耳障りなだけだ。

クラスには付き合って1年半になる彼女がいる。

アイツは進路についての話は一切しない。

アイツには何かを犠牲にしてまで、やりたいことがある。

だからもう悩まない。迷いもない。

そう覚悟を決めるまで、どれだけ悩んだかをオレは知っている。

少なくとも、このクラスの連中よりは。

アイツと初めて会ったときは覚えていない。

覚えているのは、初めて異性として意識したときだ。

アイツの家は、オレの家から大きな国道をはさんでほぼ真向かいにある。

その国道のせいで、中学は別々だった。

どんな中学生生活をすごしていたのだろうか。

部活に打ち込んでいたのか。恋愛に夢中だったのか。

気にならないと言えばウソになる。

けど聞けないでいる。

きつと聞きたくない過去も浮き彫りになる。

高校に入り、オレは単車に夢中になった。

国道のこちら側の、家の真向かいにあるバイク屋『シルバーホース銀馬』に中学のころから入り浸っていた。

店主の西島さんはオレの憧れだ。

こんなオヤジになりてえ。そう本気で思えるオトコマエだ。

だから高校に入るなりバイトを始めた。

近所のラーメン屋で、餃子を作り続ける日々。

周りの連中は高校生になり、少し大人になった気味でいるらしい。

夜な夜な遊びとおしたことを、後日、さも自慢げに話してくる。

餃子を焼く鉄板に触れ、何度も火傷をした。

その度に風呂に入るのが憂鬱になった。

そんな苦勞も、部屋に戻れば一瞬で救われた。

壁一面に貼った、C B 4 0 0 F o u r のポスター。

こいつに乗って、思いのままに走る。

その妄想だけで、退屈な日々を輝かすことができた。

当時、その単車を手に入れようとしていた自分は愚かだったと後に気づく。

高校生には買えない代物だ。

結局オレは夏休み明けにGB250クラブマンを買った。

単車に乗り出して、生活がガラリと変わった。

「この瞬間のために生きている。」

そう思える瞬間が幾度となく訪れた。

それに伴い、学校も遅刻しがちになっていた。

時間がもったいなく感じた。

少しでも単車に乗っていたかった。

その日も寝る間も惜しんで単車に乗った。

さすがに夜通し走ればクタクタだ。

いつも通り、帰りは国道をクルマをすり抜けながら進む。

もう太陽は完全に昇ってしまっている。

遅刻か、セーフか、微妙な時間だ。

国道を左折すれば家はすぐそこだ。

けれども信号は赤。

じれったさに軽く舌打ちをする。

そんなオレに、横断歩道を渡る1人の女子校生が近づいてくる。

「また遅刻？」

彼女はそれだけ言って学校に向かった。

一瞬だった。彼女の表情さえ見られなかった。

微笑んでいただろうか。軽蔑していただろうか。

いつもなら遅刻など気にしない。

急ぎもせずにゆっくり仕度して、学ランに付いたホコリを落としてから学校に向かう。

H Rの始まる10分前に家を出れば十分に間に合う。

中学校より、高校の方があきらかに家から近い。

そんな余裕はその日はなかった。

早く学校に行きたい。

なぜかはわからない。

とにかく、早く学校に行きたい。

いつになく息を切らして教室に入ったとき、彼女はすでに席についていた。

いままで彼女のことを気にしたこともなかった。

特別に美人というワケでもない。

けれど、気なってしまうている。

自分の気持ちに気づかないフリができないくらいに。

学校で話かけることは不可能だった。

そういう性格なのだ。

斜め後ろの席の彼女を見るために、用もないのに何度も後ろの席の男に話しかける。

入学して半年、今まで喋ったこともないようなヤツにだ。

彼もビックリしていただろう。

だが、その時ダシに使っただけのはずの彼とは今では無二の親友だ。名はナオキ。オレの影響で単車に乗り出し、今では生粋の単車コソ
ーだ。

帰宅途中、この気持ちを誰かに伝えたくて仕方なかった。

家に帰ることもなく、向かいの『銀馬』に立ち寄った。

西島さんはオトナだ。

ガキのまとまりのない話をイヤな顔もせず聞いてくれる。

少し日が落ち、辺りが暗くなっても、オレの話は終わらない。
いや、終わらせないようにしている。

なぜなら、彼女はこの道を通って帰ってくるはずだからだ。

話は続き、もう店を閉める時間を過ぎていた。

けれども、西島さんは何も言わず付き合ってくれている。

さすがに少し罪悪感を感じ、帰ろうと立ち上がった。

すると西島さんはようやく片付けを始めた。

オレに気を使わせないように、片付けずにいてくれたのだ。

オレは初めて店の片付けを手伝った。

西島さんの優しさに報うために、手伝わずにはいらなかった。

手伝いの途中、すっかり忘れていた彼女の声がした。

「バイク屋さんでバイトしとんのや。かっこいいやん。」

その時の彼女の表情は暗闇の中、はつきり見てとれた。

その屈託のない笑顔を見た瞬間、オレは恋に落ちた。

第2話・回想2（前書き）

三重弁がさらにきつくなってきた・・・。

第2話：回想2

その夜、オレは單車を走らせることはなかった。

『シルバーホース銀馬』で彼女に話かけられたが、会話にならず、齒がゆかった。

翌日リベンジするために、今日はじっくり部屋でイメトレだ。

とりあえず話すきつかけがほしい。

かと言って周りに人がいる状況で話しかけるのは性格上ムリな話だ。

やっぱ一緒に登校しながら喋るのがベストか。

けどどうすれば……。

そうこうしているうちに空が青白くなってきた。

小鳥が歌いだす。街が忙^{せわ}しくなる。

とりあえず寝るのをあきらめ、1階へ降りる。

母はオレがこの時間に家にいることに驚いている。

父親はいない。ここ数日、家に帰っていないようだ。

そのへんの事情はわかっている。

女だ。

オレがまだ親に甘えたい年頃るとき、両親の間にイロイロあった。

母はいつもピリピリしていた。

オレは少しダダをこねるとすぐに殴られた。

母はオレを殴った直後、泣きながら謝り、オレを抱きしめた。

まだオレは幼かったが、はつきりと父親を憎んでいた。

単車に乗っていない時は時間がゆっくり流れた。

少し外に出てみると、なんだか久しい風景だ。

時間があれば単車に乗って、学校に行って、バイトに行って。

こんなにゆっくりと風景を眺めることもここ最近なかった。

「そんじゃ、鍵頼むで。いつてくるわ。」

玄関のドアが開き、母親が出てきた。

母は朝早く出勤する。

オレが親離れするのと同様進行で母は自立しようとしている。

こんなクソまみれの家に母を閉じ込めたのはオレだ。

オレが金銭的な面でも、精神的な面でも両親を必要としていたからだ。

まだ彼女が登校してくるまで時間がある。

もうオレは登校の準備万端だ。

遠足に行く小学生のような身支度の早さが少し恥ずかしかった。

イロイロ考えた結果、洗車でもしながらさりげなく待つことにした。

軽く洗車を始めたのに、細かい部分まで気になりだした。

スポンジと中性洗剤、ウェスとワックスまで持ち出し、いつの間に

か意地になって取り掛かっていた。

「あつ、クラブマン!!」

自分の単車の名前が女の子の声で呼ばれた。

そんな違和感にビククリして後ろを振り返ると、彼女がいた。

「今日も遅刻する気なん？」

オレは洗車に夢中になっていて、もうシャツも脱ぎ捨て、呆然とそこに立っていた。

「そんじゃ。」

彼女は行こうとする。

オレは洗車道具を持ったまま少し追いかけ声をかけた。

「単車好きなんっ？」

「ん〜ん。別に。」

彼女は笑顔でそう答えた。

最近はおトコでも単車の名前を知らないヤツが多い。

なのになぜ彼女は知っているのか。

啞然とするオレに、

「クラブマンだけ。」

彼女はまた笑顔で言った。

「あ、ウチ、今度原付買おうと思うんやけど、ぜんぜんわからんから教えてよ。」

「あ？おう。任せろ。」

そうオレが答えると、彼女は駆け足で学校にむかっていった。

気づけばもう遅刻確定の時間だ。

笑顔で遅刻したオレに、担任は呆れはてた表情だった。

話かける理由をゲットしたオレは最高に気分がよかった。

こんな些細なことが幸せに思えるオレは、最高にめでたいヤツだ。

話しかけるタイミングを見計らうオレに、

「ジンの毎日エンドレスに続く単車自慢話にやられたっ。実は俺、昨日、自動車学校申しこみに行ってまったあ。」

ナオキだ。

ジンはオレのあだ名。本名は仁^{ひとし}。

「ホンマかつ。ようやったっ。」

素直にうれしかった。最近、独りで走ることが少しさみしくなってきたころだ。

「今度バイク屋連れてってさ。俺ようわからんし。」

「任しかんかいつ。」

彼女に続いてナオキとも似た約束をした。

これはチャンス。

ナオキと一緒に行けば100倍話しかけやすい。

「実は……。」

ナオキに事情を説明し、一緒に話かけに行った。

「吉崎さん。」

初めて彼女の名前を呼んだ。

ナオキと一緒に声をかけたにも関わらず、指先は尋常じゃないほど臆病に震えている。

「実は……。」

3人で『銀馬』に単車を見に行こうと提案した。

声まで震えてやしないかと心配になるほど鼓動が早い。

「わかった。実は、もう買う原付決まっとなのやけど、新車は高く
て買えやんくて……。けど中古やと悪いのとかもあるらしいし。
そこんとこのアドバイスお願いしたいんさ。」

吉崎さんは普通に話せているようだった。

なんだか自分だけが意識しているようで一気に恥ずかしさが増した。
顔が熱くなっていくのがわかる。

「了解。じゃあ……。」

日時を打ち合わせて会話は終了した。

話が終わり、授業が始まった。指先は震えたままだった。

第3話：回想3

『シルバーホース 銀馬』に3人で単車を見に行く約束。

その約束をした日から、夜な夜な単車に乗ることはなくなった。

朝、彼女と登校することが新たな日課になっていた。

もう大分話すのにも慣れてきた。

緊張も、当初に比べたら全くないと言っている。

いつの間にか彼女のことを呼び捨てで呼んでいた。

けれど、一つの感情だけは膨らみ続ける。

今日は『銀馬』の約束の日。

彼女がほしがっていた原付は、モンキーだった。

そのことを西島さんに伝えたら、倉庫に数台あるとのこと。

この日にあわせて店頭に持ってきてくれるそう。

『銀馬』はオレの家の目の前にある。

彼女の家からも徒歩1、2分だ。

約束の時間まで30分。

先に『銀馬』に行って待っていることにした。

すると1台の見慣れないSR400がとまっていた。

女性ライダーだ。

西島さんとは仲がよさそうだ。

「おう。ジン。こっち来いや。コーヒー淹れたてやで。」

西島さんはオレの性格をよく知っている。

オレという人間は、仲よくなると喋り倒すくせに、かなりの顔見知りなのだ。

だから西島さんが声をかけてくれなければ、オレは店に入れなかった。

「こいつがジン。ほれ、前にクラブマン先越されて買いそこねたやつ。こいつが買ったんさ。」

西島さんはオレの頭を驚づかみにしてケラケラ笑っている。

要するに、この女性は『銀馬』においてあったクラブマンに目をつけていたが、オレが先に買ってしまったというワケだ。

その後、状態のいいクラブマンを探していたが、その途中、今のSR400に出会い、購入したという経緯を聞いた。

中古の単車は、出会うタイミングが大切だ。

もし良い中古の単車に出会っても、その時の予算や免許の有無によって、すぐを買うというワケにはいなくなってくる。

オレは運がよかった。

いいタイミングでコイツに出会えた。

人も同じようなものかもしれない。

もしかすると、ふとしたことで吉崎やナオキ、西島さんにも出会えてなかったかもしれない。

オレは本当に運がいいヤツだ。

単車話で盛り上がっていると、吉崎が現れた。

「あつ、モンキー。やっぱりカワイイわあ。」

「おつ、いらっしやい。」

西島さんが吉崎の接客をし始めた。

すると女性ライダーが、

「自分、ホンマにギア付きのバイク乗れるんか？」

吉崎に言い放った。あまりにも馴れ馴れしい口調だ。

カチンと来たオレはすぐさま強い口調で言い返した。

「誰でも最初はエンストさせまくって、立ちゴケして、そうやって徐々にうまくなってくもんでしょ？」

そこいらの婆ちゃんでもカブ乗り回しとんやし、全然大丈夫つすよ。」

まだ吉崎に見せたことのない、あまりに素に近い部分をさらけだしてしまった。

「……わはははっ。」

何だかわからないが、オレ以外のみんなが笑い出した。

「ちよっ、西島さん……？」

ワケがわからないオレに吉崎が、

「あ、これ、ウチのお姉ちゃん。」

なぬっ。

やっちまったあ。

さっきのはかなり素に近い部分だった。

今まで吉崎と話すときは3、4枚猫を被っていたのに・・・。

「ジンくんて、優しいんやな。」

吉崎は笑いながらそう言った。

「バカヤロ。」

そんな一言にも猛烈に照れてしまう。照れ隠しに放った一言だった。

こうして場の雰囲気は温まったところでナオキがやってきた。

『銀馬』においてある単車を見ながら、ナオキは上機嫌だ。

「お姉ちゃん、そのころ毎日クラブマンについて熱弁してきてさあ。」

吉崎も上機嫌だ。話が止まらない。

「他の単車は全然わからんけど、お姉ちゃんのせいでクラブマンだけは見ただけでわかってまう特異体質になってしまっ、
やからあの時ジンくんの単車見てすぐクラブマンってわかったんさ。」

吉崎は明らかにいつもと違う感じだった。

さっきオレが素を見せたことで、吉崎も少し素に近い部分を見せてくれているんだろうか。

「吉崎の姉ちゃんのSR、結構イジってありますね。」

すると吉崎姉が笑いながら、

「吉崎の姉ちゃんって・・・呼びにくいやろ。詩織でええよ。」

ガキっぱいが、オレは女性を下の名前で呼ぶのに抵抗がある。

しかし、詩織さんはそうゆう変な意識をせずに接せる女性だった。

話もそこそこに、詩織さんは美しいエキゾーストノートを響かせ走っていった。

「詩織さん、なんかかつこええ女って感じやな。」

オレは吉崎に言った。

「何でもできてまうからな。アイツは。」

トゲがある口調で、吉崎はオレにそう返した。

けれどそのトゲはとても柔らかかった。

吉崎は『銀馬』で黄色いタンクのモンキーを買った。

諸経費＋車体価格＝14万円。

1週間後には納車だ。

「14万か。バイトどこでしとんの？」

オレが吉崎に聞いた。

「両親が厳しくて、バイトさせてもらえやんのさ。バイトしたいんやけどなあ。じゃ、今日は帰るわ。おやすみ。」

吉崎は落ち込んでいるようだったが、オレにとっては羨ましい限りだ。

みんなが遊んでいる時にオレは何度も火傷しながら必死で金を稼ぎ、やっこの思いで愛車を手に入れた。

人それぞれ生きている環境が違うのは当然だし、オレは声を高らかに不満を言えるほど恵まれていないというほどでもない。

世の中にはもつと恵まれていない人々がたくさんいると、授業でも

聞いた。TVも毎日のようにそんな報道をしている。

けれど、それはあまりに非現実的だ。

現にこうして、自分より恵まれている人がいる。

オレはまだガキンちよだった。

そんな不満を西島さんにこぼしてしまった。

西島さんなら、いつものようにわかってくれる。

優しく話を聞いてくれるだろうと。

「ジン。お前の人生やろう。自分の人生は自分で切り開くもんなん
ちゃうんか？それにお前は男や。周りに期待すんな。

お前ならそれができるやろう。クラブマンのために頑張った
お前、かつこよかったで。」

西島さんの言葉は、今でも全部、心に響き続けている。

上辺だけのヤサシイコトバではなく、全部オレのためを思っ
てくれた言葉だ。

西島さんは、やはり底抜けに優しくかった。

第4話：回想4

いつの間にか日差しは穏やかになり、夜は肌寒いくらいだ。

そろそろ夜空がキレイになる季節。

単車を走らすと、体感温度は一気に低下する。

そう忠告しておいたせいか、吉崎は服を大量に着込んできた。

「・・・それならコケてもまあ大丈夫やな。」

単車はタイヤが2つしかない乗り物だ。

だからバランスを崩せば車体は倒れる。

何より、単車は独りではただ立つことさえできない。

だから単車と対話しながら運転する。

対話と言っても、実際に話すわけじゃない。

単車は喋ることができない。

倒れないようにするには、ライダーがただただ、単車を思いやるしかない。

単車が出ず、ごく僅かなサインをライダーが気づいてあげなければ、単車は簡単に倒れる。

逆に、そのサインに気づき、対処さえすれば、単車は簡単には倒れない。

単車がサインを送り、ライダーがそれに応じる。

また、ライダーが送る意思に、単車は全力で応えようとする。

これを、「対話」と表現する。

人にも似た現象がおこることがあると思う。

相手が気持ちを言葉にすることができず、しかし、小さなサインを出していたら。

それにこちらが気づいてあげるしかない。

気づかず自分勝手をすれば、相手は倒れ、自分も一緒に倒れる。

そして、お互いが傷つく。

また、サインに気づいて、相手を思いやることができれば、倒れずにすむかもしれない。

「寒いのはホンマ苦手なんさ。」

吉崎は少し鼻をすすりながら言う。

今夜は冷える。

きつと星も頑張ってくれる。

ナオキはバイトが忙しく、まだ免許がとれていない。

「ホンマゆっくりな。」

吉崎は周りに気を遣いすぎる。

しっかり釘を刺しておかないと、自分のペースを乱してまで周りに合わせようとする。

信号待ちで2台が並ぶ。

今までのように1人で走ってきたときには味わえない、何かが確かにある。

単車をそんなに早く走らせなくても、十分に楽しい。

少し渋滞して、思い通り走らせることができなくても、何も苦ではない。

山の中は特によく冷える。

いい感じだ。

冷えれば冷えるほど、星は輝きを増す。

今年の12月には流星群が流れるという。

その時は3人で見ようと星に誓う。

10時くらいだろうか。

見慣れた町並みが戻ってきた。

ひとまず、コンビニのコーヒーで暖をとる。

オレはこの最高の時間を少しでも引き延ばそうとしていた。

しかし、ケータイを見た吉崎の表情がこわばる。

運転中はケータイが鳴っても気づかない場合が多い。

家からの着歴が何件も入っているそうだ。

迂闊だった。吉崎は女の子だ。

親が心配しないワケがない。

とりあえず急いで帰宅した。

吉崎の家の前。

「今日はありがとう。また行こなあ。」

吉崎は笑顔で行こうとする。

精一杯の笑顔だったろう。

オレは罪悪感でいっぱいだ。

このまま帰るなんて、もつと残酷だ。

その時、オレは自分勝手だったのかもしれない。

オレも謝りたい、と言った。

そうなれば事態は悪化するかもしれない。

こんな時間までオトコといたなんて、親をさらに怒らすだけかもしれない。

吉崎は黙ってしまった。

オレも黙ってしまった。

謝ることで、自分の罪を償いたいだけなのかもしれない。

本当に吉崎のことを考えれば、このまま帰った方がいいのかもしれない。

オレがここで出て行ったら、ごまかし様がない。

2人は答えを出せずにいた。

「大丈夫。行くわ。」

しばらくして、吉崎は笑顔でそう言った。

その瞬間、

「オレっ、お前が好きやつ。」

想いが破裂した。

オレは、吉崎がこのまま遠くに行ってしまうような危機感にさいなまれていた。

気づくと、オレは吉崎の手を握り締めていた。

決して離さないように、離れないように。

強く、強く、
・
・
・
。

第5話：回想5

玄関が開く音がする。

オレが時間に不相应な大声をだして、その玄関を開けさせてしまった。

「あれ、ジンくん。」

詩織さんだ。

オレは吉崎の手を握ったままだ。

「ジンくん、何してんの？」

詩織さんは笑っている。

「あ、沙織。ご飯どーすんの？」

2人ともフリーズしてしまった。

思考回路も、身体も。

「お父さんとお母さん、新しいクルマ見に行ったよ。ついに買い換えるらしいわ。ついでに外食して、温泉行ってくるってさ。」

もうすぐ帰ってくるやろうけど・・・ってか、あんたご飯どうすんの？」

詩織さんは吉崎に聞く。

どうやら、吉崎に何度もTELLしていたのは詩織さんらしい。

そういえば、夕飯は食べていない。腹ペコだ。

けれど、オレはいつも腹ペコで走っているから気にならない。

オレの腹が減っても、単車は動く。

だから最近はお自分のことより、単車することに散財させている。

吉崎は周りに気を遣いすぎる。

きっと腹ペコだったに違いない。

「一応、残してあるから、腹減ったのなら食いな。」

そう言って詩織さんは家に戻っていく。

「うん。」

とだけ、吉崎は答えた。

オレはまだ吉崎の手を握ったままだ。

安堵感からか、二人の顔がほぐれた。

吉崎は笑いながら照れている。顔が真っ赤だ。肌が白いぶん、それは一目でわかる。

「好きやよ。」

オレは吉崎の手を離しながら言った。

今度は笑顔で言うことができた。

すると、吉崎はオレの手を追いかけて握った。

満面の笑みだ。

それだけで、十分に吉崎の気持ちは伝わった。

翌朝、『シルバーホース銀馬』の小さな駐車場でいつものように吉崎を待つ。

けれど、気持ちだけはいつものようにとはいかなかった。

ハッキリ言って、逃げ出したい気分だ。

緊張に押しつぶされそうだ。

今日からの2人はもう、昨日までの2人じゃない。

オレは落ち着きなく、駐車場に転がる小石を蹴り飛ばし続けた。

すると、吉崎より先にナオキが現れた。

ナオキの家は学校の向こう側だ。

自転車を立ちこぎしてきたせいか、息がきれている。

「見ろやあ。」

勢いよく眼前に何かを突き出してきた。

免許証だ。

「おおつ。」

朝っぱらからオトコが二人、騒がしく喜び合う。

肩を組み合い、こ踊りしていたところに、吉崎が現れた。

「どうしたん、どうしたん？」

そんな二人を見て、吉崎も何やら嬉しそうだ。

吉崎はナオキの免許証を見て、さらに笑みが増した。

ナオキの免許証のおかげで、オレたちは自然に接することができた。

ナオキは有頂天だ。

オレも、免許をとった夜は何度も何度も、免許証を食入るように眺めた。

だから、ナオキの気持ちは十分にわかる。

授業が始まってもナオキは免許証を財布から出して眺めていた。

「お前はガキか。ガキンちよかお前は。」

オレは何度もナオキにそう言った。

そう言っで、少しオトナなフリをしていた。

オレ達を通う学校は、原付や二輪免許の取得は禁止されている。

禁止されてはいるが、そんなものは形だけだ。

だからといって、教師に免許証を見られるのはまずい。

そんなことはおかまいなしに、ナオキは喜びを抑えられずにいた。

けれど、それはオレも一緒だ。

ナオキの免許もその1つだが、もう1つの大きな喜びに心が支配されている。

昨夜、吉崎の家の前。

伝えあった、お互いの想い。

恋人同士の約束など、何もしてない。

けれど、オレはそれだけで満足だった。

喜びで胸がはち切れそうだった。

ふと、笑みがこぼれる。

何度もだ。

周りから見たら、変態だ。

そんなことはおかまいなしに、オレは喜びを抑えられずにいた。

それと同時に、オレは吉崎を意識しすぎていた。

2人きりになりたい。

2人きりで喋りたい。

けれど、想像しただけで緊張して、逃げ出したい気持ちになる。

心が矛盾する。

今までで、最強の矛と盾だ。

それらが心の中で激しくぶつかっている。

この戦いを終わらせてくれる何かを、オレは密かに待っていた。

「バイト頑張って金もそこそこ貯まってるし、今度『銀馬』行こな
っ。」

最後の授業が終わり、急いでバイトに向かおうとするナオキが元気よく言った。

ナオキは単車のこと頭がいつぱいだ。

「おう。」

オレは小さく返事した。

オレはもう、吉崎のことで頭がいっぱいだ。

ナオキの言葉も半分しか入ってこない。

しかし、『銀馬』という単語から、西島さんの言葉を思い出した。

オレはその時、周りに期待していた。

けど、それじゃアカン。

オレはオトコや。

自分で切り開くんや。

そう決意して、吉崎を見る。

吉崎は友達と帰ろうとしている。

「吉崎っ。」

オレは焦って声をかけた。

大きな声だった。

吉崎達はビクリしている。

周りの連中もビクリしている。

「悪いけど、吉崎借りるで。」

吉崎の腕を掴み、吉崎と帰ろうとしていた友達にそう言った。

自分が何を言っているのかわからなかった。

足はガクガク、手もブルブル震えている。

「ごめん。また明日な。」

吉崎は友達にそう言った。

友達心配そうな表情だった。

というより、周りの連中みんなが心配している様子だった。

廊下に出て、やっと吉崎の腕を掴んでいることに気づいた。

とつさに離し、

「じめん．．。」

とだけ言った。

「全然。」

吉崎は首を振りながら言った。

笑顔だ。

その笑顔を見て、オレは猛烈に安心した。

今までの不安がキレイに一掃されるほどの安心感だった。

今までも、2人で廊下を歩くはあった。

けれど、いつもより寄り添って歩いているように感じた。

何度も手や腕が当たる。

オレが吉崎にいつもより近づいているのか、吉崎がそうしているのか。

それはわからないが、周りから見ても『特別な2人』とわかる距離感だ。

案の定、ジロジロ見られている気がする。

いつも声をかけてくる知り合いも、今日は声をかけてこない。

その代わりに、ニヤニヤした、いやらしい目線を送ってくる。

吉崎とこうして歩くのは嬉しかったが、恥ずかしくもあった。

無意識に歩くスピードが速くなる。

吉崎はそれに必死についてくる。

そんな吉崎に気づき、ペースを落とす。

そうすると吉崎は嬉しそうに笑った。

それだけで、この恥ずかしい思いも苦ではなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2895h/>

クラブマン

2010年10月21日13時17分発行